●征くシリーズ●取材・執筆・写真／本誌編集部

大航海時代の夢を追って

リスボンを征く

15世紀半ばに幕を開けた大航海時代。ヨーロッパの国々が富を求め争って『海外』へと船出した時代だ。そんな中、他国に先駆け、スペインとともに世界の植民地で覇権を争ったのがポルトガルだった。その栄華の時代は短かったが築かれた遺産は今も首都リスボンの各所で変わらぬ輝きを保っている。今号では、1584年に「天正遣欧使節」がヨーロッパ訪問の足がかりとして上陸した地でもあるリスボンを征くことにしたい。

ユーラシア大陸の西端からさらに西へ

「ここに地果て、海始まる」

これは、ポルトガルの著名な詩人ルイス・デ・カモンイスが、ユーラシア大陸最西端にあたるロカ岬で詠んだ詩の一節として知られている。縦に細長い四角のような形をしたポルトガルは、国境のほぼ半分が大西洋に接しており、十五世紀半ばに始まった大航海時代で、同国が快調なスタートを切ったのも決して偶然のなりゆきではなかったと思わせる。

この海の向こうに何があるのか―。

それを探しに出かけたのが、バーソロミュー（ポルトガル語では「バルトロメウ」）・ディアスや、ヴァスコ・ダ・ガマたちだった。

例えば、スイスのようにまったく海に接していない国と、新しい世界への扉となり得る海に面している国では発想に大きな開きがあったことは容易に想像がつく。そしてポルトガルに関しては、大航海時代に同国が華々しい成功を収めるにあたり、歴史の流れが大いにそれを後押しした。

今号のテーマであるリスボンについて述べる前に、駆け足でポルトガルの歴史をふり返っておこう。

今日のリスボンがあるあたりには、紀元前一二〇〇年ごろ、すでにフェニキア人が住んでいたと見られている。フェニキアは、現在のシリア・レバノン・イスラエル一帯で栄えた古代国家で、進んだ航海技術を有し、その活動範囲は広く現イングランドのコーンウォール近辺まで及んでいたという。テージョ川のほとりにあるリスボンは、食糧などの補給地を置くのに最適な場所として選ばれたようだ。

約千年後の紀元前二〇五年、リスボン地域はローマの支配下に入る。ポルトガルという地名は、ローマの言語で「ケルト人の港（Port of the Celts）」を意味する「Portus Cale」がもとになっていると考えられており、その頃には、イベリア半島にケルト系の先住民が定住していたことを示している。

イベリア半島とその対岸に位置するアフリカ大陸は距離的に近く、同半島は、アフリカ大陸北部で強い勢力を誇ったイスラム系ムーア人（Moorish）に古くより脅かされてきた。キリスト系ヨーロッパ人によるレコンキスタ（国土回復運動）が行われ、ムーア人勢力は同半島から追われることになるが、数世紀の間に混血が進んだのは、むしろ自然なことだったと推測できる。世界でも有数の高給サッカー選手として知られる、ポルトガルのクリスティアーノ・ロナウド選手などを見るたびに、同半島の歴史とムーア人のつながりの深さを思う。

その後、五世紀にローマ帝国が滅亡したのをうけ、ゲルマン人が中央ヨーロッパから西ヨーロッパへと流入し、さらにはイスラム系ムーア人がイベリア半島へ侵入。七一九年にはリスボンがムーア人に占領されるなどしたが、今度はこれに反発する形で、レコンキスタ（国土回復運動）が始まった。一一三九年、オーリッケの戦いで勝利を得たアフォンソ・エンリケスがポルトガル王国の樹立を宣言、初代ポルトガル国王を名乗り、それ以降、イベリア半島からのムーア人勢力駆逐がさらに進められることになる。

ヨーロッパ人とムーア人は敵対していたわけだが、ムーア人がもたらした技術の数々は、イベリア半島の国、すなわちポルトガルとスペインに計り知れぬほどの恩恵を与えた。当時、イスラム文化はヨーロッパ文化に比べて何歩も先をいっており、優れた航海技術がポルトガルとスペインに伝授されたのである。航海に欠かすことのできない羅針盤も、ムーア人によって伝えられ、両国が大航海時代の先陣を切ることができたのは、ひとえにイスラム文化のおかげといえ、まさに、禍福はあざなえる縄のごとし―というところだろう。

大航海時代の成功はイスラム勢力のおかげ

ポルトガルとスペインが、他国をリードすることになった理由はもうひとつある。十五世紀、勢いを失ったモンゴル帝国にかわって台頭したオスマン帝国（首都はイスタンブール）は、イタリアの諸都市国家からなる連合艦隊にも打ち勝ち、地中海の制海権を掌握。東西貿易の唯一のルートだった地中海交易は、オスマン帝国の管理下に置かれ、高い関税がかけられるに至った。ヨーロッパ諸国は新たな交易ルートの開拓を迫られるようになったのだが、そのための探検船団を送るだけの国力を備えていたのは、当初ポルトガルとスペインだけだった。

数世紀にわたり、イスラム系勢力から圧迫され、それがレコンキスタにつながった両国では、民族主義の高まりも激しく、その結果、国王を頂点とする強力な中央集権制国家の誕生がいち早く可能となったのである。船団を送るには資金がいる。ポルトガルとスペインは、先を争うように投資し、海へと乗り出していく。これが大航海時代の始まりであった。

また、腐敗したローマ・カトリック教会に反発して生まれたプロテスタント勢力にさらに対抗するため、ヨーロッパ以外、つまり「海外」での新規信者獲得に意欲的だったローマ教皇も、新天地の発見をめざす航海事業を積極的に支援した。ポルトガル、スペインがともに強力なカトリック教国だったこともあり、船団には宣教師を便乗させ、文字通りカトリック教会の世界進出を目論んだ。その一環として、一五四九年にフランシスコ・ザビエルが初来日を果たしたことは、読者もご承知の通りである。

ポルトガルとスペインがまず取り組んだのは、新しいヨーロッパ～インド航路の開拓だった。大航海時代の初期、ポルトガルの航海王子（一三九四―一四六〇、英語では「Prince Henry the Navigator」）ことヴィゼウ公エンリケは、大々的に探検事業を支援。リスボン郊外に建立された「発見のモニュメント」＝右頁の写真＝で、多くの探検者の先頭に立つのはこのエンリケ航海王子であり、彼の果たした役割がいかに大きかったかを伺わせる。

バーソロミュー・ディアスが一四八八年、喜望峰を発見。一四九八年には、ヴァスコ・ダ・ガマが喜望峰経由でインド南西のカリカットに到達し、ポルトガルはヨーロッパのどの国よりも早くインド洋航路を確立することになる。

さらに、一四九二年にはスペインの支援により探検に出発した、現イタリアオのジェノヴァ出身のクリストファー・コロンブスが西インド諸島を発見。アメリカ航路ではスペインが先手を打ち、インカやアステカ文明が滅びるまで搾取し尽くすが、ポルトガルも一五〇〇年、ブラジルに上陸。こうして、「早い者勝ち」に近い状態で、インド、東南アジア、北・南米大陸では、激しい植民地獲得争いが繰り広げられたのだった。

しかし、ポルトガル、スペインによる独占時代は長くは継続しなかった。十五世紀終盤からは、絶対王政による中央集権国家がようやく成立した英国、フランス、さらにはスペインからの独立を果たしたオランダが次々に参入。熾烈な競争の時代に突入し、やがて、占領してもうまみのない辺境地域や、日本をはじめとし、独立を保った一部の国などを除く世界のほぼ全域はヨーロッパ列強に「分割」され、十七世紀中ごろ、大航海時代は幕を閉じたのだった。

かつての大国を襲った勝者必衰のことわり

ブラジルを筆頭に、北アフリカ、インドのゴア、明のマカオなど、ポルトガルは世界各地に植民地を獲得した。一時はスペインと世界を分割するほどの勢いを誇り、間違いなく、ポルトガルは世界きっての有力国家であった。それほどまでに華々しい成功を収めた同国だったが、その栄華は久しくは続かなかった。

植民地から流れ込んだ富は、個人の資産家のふところを豊かにしただけで、国内産業の育成、社会制度の整備などには使われず、国力は伸び悩んだ。それどころか、極度の貿易不均衡により、逆に新興国家である英国やオラン

大航海時代における ポルトガルの躍進の立役者
エンリケ航海王子（1394 -1460）

「王子」とはいえ、現在に伝えられている肖像画はこの通り、かなり年配になってからのもの。発見のモニュメントの先頭に立つ姿は若々しいが…。なお、余談ながら、初期の航海では、船乗りたちの生還率は2割にも満たなかったという。遭難したり、立ち寄った先で襲撃されたり、あるいは壊血病（ビタミンC不足から起こる）や疫病感染などで落命したりと絶えず生命の危険にさらされた。それでも一攫千金を夢見て多くの者が船出したのだった。大航海時代を支えたのは、人間の欲だったと言えそうだ。

リスボンを効率よく観光するのに大活躍！ LISBOACARD リシュボアカード

リスボン市内のバス、路面電車（tram）、ケーブルカー（ascensore）＝写真下、地下鉄（metro）に乗り放題、リスボン～シントラ／リスボン～カスカイス間の電車も無料になるほか、主要な観光スポットへの入場料が無料か割引になる、便利なカードが「LISBOACARD」。空港、リスボン市内のツーリスト・インフォメーション・センターで購入できる。

無料になる観光スポットの例：ジェロニモス修道院／ベレンの塔／アジュダ宮殿／国立古美術館／シントラの王宮
割引になる観光スポットの例：サン・ジョルジェ城（30%引き）／サン・ロケ博物館（40%引き）／ファド博物館（30%引き）／シントラのペーナ宮殿（3ユーロに値引き）

- 24時間カード：大人 16ユーロ　子供（5-11歳）9.5ユーロ
- 48時間カード：大人 27ユーロ　子供（5-11歳）14ユーロ
- 72時間カード：大人 33.5ユーロ　子供（5-11歳）17ユーロ

※無料／割引となるスポットの一覧表もあるが、とりあえず、どこに行っても「LISBOACARD」を提示して、無料になるか、あるいは割引があるか聞いてみることをお薦めする。

発見のモニュメントから望む4月25日橋。橋の右側に十字架のように見えているのは、「クリスト・レイ（Christo Rei）」と呼ばれる巨大なキリスト像。ブラジルのリオ・デ・ジャネイロのキリスト像を模して造られたもので、1959年に完成した。

つぎ込まれた宮殿や教会建築、美しい町並みは観光産業には貢献しても、国家としてのポルトガルを世界トップレベルに押し上げるには、何の役にも立たなかったのである。

ブラジルでは金やダイヤの鉱脈が発見されたものの、相変わらず国内産業の育成は軽んじられた。経済的にヨーロッパの後進国として、他国の後塵を拝す立場に甘んじるようになったポルトガルを立て直そうとした、ポンバル侯のような人物も現れたが、それだけでは十分とはいえなかった。

一七五五年、市民の三分の二にあたる約六万人が犠牲になったリスボン大地震の後、ポンバル侯の命のもと、リスボンは再建され、大きな復興を遂げた。しかし、一八〇七年のナポレオン軍によるポルトガル侵攻（英国の支援を受けて辛うじて撃退）、一八二二年のブラジルの独立など、ポルトガルの没落ぶりには拍車がかかるばかりだった。

やがて一九一〇年、クーデターにより王政は倒れ、共和国が誕生。しかし、慢性的な財政赤字と英国への巨額の借款に苦しむ一方、内政は混乱が続いた。一九二六年のクーデターで国内に一応の秩序をもたらしたカルモナ将軍は、コインブラ大学教授サラザールを蔵相に抜擢。財政の奇跡的な建て直しに成功したサラザールは三二年、国民の圧倒的な支持を受けて首相に就任し、以後、サラザールが脳卒中で倒れる六八年まで独裁性が敷かれたのだった。

七四年四月二十五日、無血革命（カーネーション革命）が起こり、新政府が誕生、民主化が急速に進められた。リスボン郊外にかかる、サラザール橋と呼ばれた橋が、四月二十五日橋と改名されたことからも、サラザールに対する、ポルトガル国民の評価を伺い知ることができる。

七五年、マカオを除く全植民地の独立を承認。九九年、マカオを中華人民共和国に返還、二〇〇二年には東ティモールが独立した。こうして、ポルトガルは大航海時代で得た領土のうち、アソーレス諸島とマデイラ諸島をのぞく全てを失ったのである。しかし、悪いニュースばかりではなく、八六年にはECに加盟、九八年には万国博覧会を成功させ、経済が順調に回復・成長していることを内外にアピールした。EU内にあっては、中堅国家として着実に地歩を固めつつあるといえるだろう。

健脚が試される「七つの丘の町」

ポルトガルが経験した、まばゆいばかりの栄光と、その後に訪れた暗い時代、そして復興への兆しを感じさせる現在までを足早に追ってみたが、リスボンも、その首都として、光と影の時代を痛いほどに味わった。

コインブラからリスボンへの遷都が行われたのは一二五五年。大航海時代には世界から富が集まり、ヨーロッパ有数の大都市として繁栄した。ただ、地震が多く、既述のとおり、一七五五年に大地震に見舞われたほか、一五三一年にも地震により甚大な被害が出たという。

また、豊かなテージョ川に沿って発展した都市ながら、そのテージョ川近くまで丘が迫っており、坂がきわめて多いのも特徴。「七つの丘の町」という別名もあるそうだが、実際に歩いてみると七つどころではない、と不平を言いたくなる人もいるに違いない。それほど坂が多く、しかも石だたみで、なおかつ何世紀にも渡り、人が歩いて磨かれたため滑りやすい。リスボン攻略の第一歩は、まず歩きやすく滑りづらい靴をはくことから、と申し上げておきたい。夏場は摂氏四十度近くになることもあり、サンダルをはきたくなる人も多いだろうが、できれば足がしっかりサポートされるタイプのものを選ぶことをお薦めする。

さて、リスボンの町を実際に歩き始めるにあたり、目印として覚えておくと便利な場所の筆頭に挙げられるのがロシオ広場。シントラへ向かう列車の発着駅でもあるロシオ駅のすぐそばにあるこの広場は、滞在中、何度も通過することになるだろう。ここから、川辺近くにあるコメルシオ広場にかけては、碁盤の目のように道路が東西南北に走る。ロシオ広場から南に下る場合には、サンタ・ジュスタのエレベーターがあるオウロ通り Rua do Ouro、歩行者天国となっており、両脇には土産物店やカフェなどがずらりと並ぶアウグスタ通り Rua Augusta など、毎回、違う道を選んで歩けば、常に新しい発見があるはずだ。

なお、この一帯はバイシャ地区 Baixa と呼ばれ、リスボン一の繁華街となっている。ただ、コメルシオ広場の再開発が進められているせいで、バイシャ地区の交通渋滞はあきれるほどひどい。市電やバス、タクシーなどに乗るより歩いたほうがよほど早いケースが少なくないことを頭に入れておきたい。

バイシャ地区の東側にあるのがアルファマ地区 Alfama で、下町情緒あふれるエリア。サン・ジョルジェ城、カテドラルがある。

一方、西側には、高級ショッピング街といわれるシアード地区 Chiado、さらにはバイロ・アルト地区 Bairro Alto が広がる。このバイロ・アルト地区は古い建物が細い路地に沿って密集しており、レストランやファド・ハウス（Fado House 十五頁のコラム参照）が数多く、ナイトライフの中心ともいうべきところだ。天正遣欧使節が訪れた、サン・ロケ教会もこの一角にある。

そして、ロシオ広場から北西方面へのびるリベルダーデ通り Avenida Liberdade は、一流ブランド店、高級ホテルなどが並ぶリスボンの目抜き通りで、ポンバル侯爵広場、一九〇二年に英国のエドワード七世がリスボンを訪問したことを記念して造られたエドゥアルド七世公園へと導いてくれる。

主な観光ポイントについては、十四・十五頁でご紹介するが、とにかく坂が多いこと、観光シーズンはスリが横行していることを念頭に置いて、散策を楽しみたいものだ。

大航海時代がもたらした大いなる遺産

リスボンの見どころは、中心部と、西へ約六キロほど離れたところにあるベレン地区 Belem に分かれている。世界遺産であるジェロニモス修道院、ベレンの塔、およびエンリケ航海王子の没後五百年を記念して建てられた発見のモニュメントがあるベレンは、何としても訪れたいエリアだが、交通の便が良いとはお世辞にもいえないのが実情。

コメルシオ広場から市電の15番一本で行けるのだが、交通渋滞の激しい場所を通ることの15番、待てど暮らせど来ない！来ても満員で乗れない、という観光客泣かせの路線である。

コメルシオ広場から西へ五百メートルほど行ったところにあるカイス・ド・ソドレ駅（地下鉄グリーン・ラインの駅も至近）から電車でベレン駅へと向かうか、このあたりからタクシーをひろってベレンの塔まで行くことをお薦めする。

ただ、ベレン内の観光ポイントも、それぞれ歩いて十―十五分以上と離れている。効率よくまわりたいなら、半日観光バスツアーを利用するのが得策といえる。例えば、リスボンに午前中に到着したら、その日の午後はリスボン中心部を観光、翌日は シントラなどを日帰りで訪れ、三日目には、朝からベレンをめぐるツアーに参加、午後はショッピングという二泊三日の旅を提案したい。

これに、切ない旋律を独特の歌いまわしで聞かせる、ポルトガルの民俗歌謡ファドを聴く夜を加えれば、「充実したリスボンの旅」のモデルの完成だ。さらに、魚介類をふんだんに使ったポルトガル料理、素朴なポルトガル菓子の数々を堪能すれば、身も心も満たされることだろう。

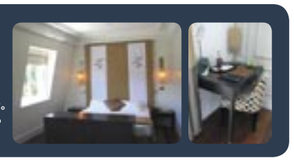
かつては、スペインとともに世界の覇者として君臨したこともあるポルトガル。鎖国前には、日本とヨーロッパをつなぐ窓口となるなど、日本との縁も深い。また、ロンドンとは時差もなく、飛行機で約二時間の距離にあるリスボンは、二泊三日ほどで訪れるのに手ごろなサイズの都市である。この秋、大航海時代の夢の跡を追う旅にぜひ出かけてみていただきたい。

リスボンの石だたみには美しい模様が施されていることが少なくない。長い年月の間、人々がその上を歩き続けた結果、見事なまでに磨かれ（そのため、滑りやすくなっているのだが）、輝きさえ放つようになっている。

リスボン市内の移動に便利な路面電車。交通渋滞に巻き込まれやすいのと、観光客目当てのスリが多いのが悩みのタネ。不自然なほど誰かが密着してきたり、目の前で突然、行く手を阻まれたりしたら要注意。また、降りる時は、車内の赤いボタン＝写真左＝を押す。

Special Thanks to:

Heritage Av Liberdade Hotel
Av Liberdade 28, 1250-145 Lisbon
Tel: (0351) 213 404 040
www.heritage.pt
リスボンにホテル・チェーンを展開するヘリテージ・グループのホテルのひとつ。リベルダーデ通り沿いで、ロシオ広場からも近く便利だった。内装もモダン。



トラベル・インフォメーション

＊情報は2009年8月14日現在のもの。

リスボン中心部

◆リスボン中心部の数ある見どころのうち、編集部が独断で選んだ4ポイント（下記参照）は、それぞれ距離的にあまり離れてはおらず、5時間ほどみておけば見学可能だろう。ただ、とにかく坂が多い！リスボンの町並みの美しさには、坂も大いに貢献していることは認めるが、筋肉痛になる人もいそう。しかもほとんどの道が石だたみなので、ベビーカーを押すのはかなりの重労働。路面電車や地下鉄、ケーブルカーをうまく利用することが、リスボン観光の成功の秘訣と言っていいだろう。
◆残念ながらスリがかなり横行しているのも事実。彼らは2～3人のグループで行動。実行犯と、すりとった貴重品を受け取って立ち去る者とに役割分担がなされている。上着や地図（観光客のフリをしているが、地図はかなり使い古されている）で手の動きを隠し、背後から近づいてくるなど、プロの手口は巧妙なので十分ご注意を。
◆お得で便利な「LISBOACARD」については、本文11ページに詳細あり。

Turismo de Lisboa
Visitors & Convention Bureau
Rua do Arsenal, 15
1100-038 Lisbon
Tel: (0351) 21 312 700
www.visitlisboa.com
www.visitportugal.com

◆リスボン市街地とベレン地区のちょうど中間あたりに位置する、国立古美術館（11ページの地図参照）は、ポルトガルの中でもコレクションのレベルの高さで知られる美術館。ここには、桃山時代にポルトガルにもたらされたという狩野派の豪華な南蛮屏風も展示されている。月曜休館。

Museu Nacional de Arte Antiga
R. das Janelas Verdes,1249-017 Lisbon
Tel: (0351) 213 912 800
www.mnarteantiga-ipmuseus.pt

サン・ジョルジェ城

Castelo de Sao Jorge - Olisiponia
Castelo de Sao Jorge, 1100-129 Lisbon
Tel: (0351) 218 800 620
www.castelosaojorge.egeac.pt

ジュリアス・シーザーの治世に建設された。城というより完全な要塞で、現在、一部の建物は失われ公園となっている。リスボンの町全体を見下ろす、軍事上理想的な場所にある。そのため、城までの道はかなり急勾配だが、城からの眺めはすばらしいの一言に尽きる（バス37番を利用すれば、城から徒歩2分ほどの地点まで行くことができる）。毎日オープン。なお、この城の足元にひろがるアルファマ（Alfama）地区は、「リスボンの下町」と呼ばれている。時間に余裕があれば、細く入り組んだ路地を歩いてみてほしい。少しはげかかった白い壁、無造作にはためく洗濯物、坂や階段で遊ぶ子供たち…ポルトガルの素顔をのぞくことができるだろう。

城から徒歩5分ほどの所に建つカテドラル

サン・ロケ教会＆博物館

Museu de Sao Roque
Lg. Trindade Coelho, 1200-470 Lisbon
Tel: (0351) 213 235 065　www.museu-saoroque.com

本誌8月6日号で特集した「天正遣欧使節」が滞在したのがサン・ロケ教会。イエズス会系の教会で、使節一行が宿泊したと考えられる修道院部分は現在残っていないが、隣接して設けられている博物館内に、桃山時代の作である工芸品、家具＝写真すぐ右上＝が展示されている。また、ザビエルの生涯を描いた油絵が壁一面に飾られた部屋も必見。日本が舞台と思われる絵が3枚含まれており、着物風（参考資料はほとんどなかったのだろう）の服装をした人々も描かれている。

サンタ・ジュスタのエレベーター

Elevador de Santa Justa
Rua do Ouro（黄金の通り）沿いにある、このエレベーター＝左下地図内のⒶ＝は、通りのレベルから高台にある住宅地まで、一気に上るためのもの。観光客でいつもにぎわっているが、現役として活躍している実用エレベーターだ。上りきると連絡橋があり、バイロ・アルト地区のカルモ教会の裏側に出る。最上階から、さらにらせん階段を上るとカフェを併設した展望台があるが、取材班が訪れた時は閉鎖されていた。

モラエスの生家

Casa de Wenceslau de Souza Moraes
明治時代初期に、作家として日本を世界に紹介したセスラウ・デ・ソウザ・モラエスが生まれた家で、ポルトガル語と日本語でその業績について触れたアズレージョ（タイル）が壁にかかっている。かなり分かりづらいところにあるが、よほどその場所を聞く日本人が多いのか、道を尋ねようとしただけで「モラエスの家でしょ？」と言われた。ちなみに、生家のある路地名は Travessa da Cruz do Torel。

ポルトガル料理&菓子

魚介類を使ったトマト風味のリゾット（Arroz de Marisco）＝写真左下＝や、タコのリゾット（Arroz de Polvo）＝写真右下＝など、日本人の口にあう料理が多いのがうれしい。また、魚介類だけでなく、ブタやウシといった肉類の料理も豊富。

ロシオ駅そばの階段をあがったところに Esc do Duque という路地がある（左地図内のⒷ）。このあたり一帯は レストランがひしめきあっており、通りにはテーブルが並び、遅くまでにぎわう。通りが坂になっているのもご愛嬌。

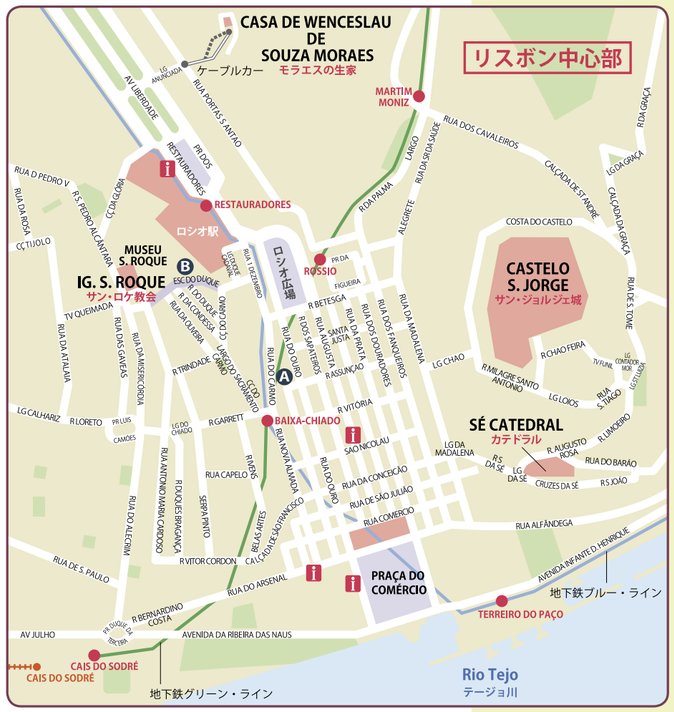
4月25日橋のたもとにあり、かつては埠頭だったドックカス地区（11頁の地図参照）は、現在はおしゃれなレストラン街になっている。

レストランで「お通し」のようにパンと共に供される、ハム、チーズ、そしてアンチョビやツナのパテ。アンチョビのパテはお土産としてもポピュラー。

菓子については、日本でも流行したカスタード・タルト「Pastel de Nata（パステル・デ・ナタ）」＝写真左＝など、とこか素朴。卵の黄身がふんだんに使われたものも多い。

Castella do Paulo
Rua da Alfandega 120, 1100-016 Lisbon
Tel: (0351) 218 880 019
www.castella.pt.vu
営業時間：月～金　7:00-20:00
土　8:00-18:00

日本に伝わり、カステラ（カスティーリャ王国のその地名が語源とされる）として定着した菓子を逆にポルトガル人に食べてもらおうと、九州の老舗菓子店で修行し、コメルシオ広場のそばに店を開いたポルトガル人男性がいる。パウロ・ドゥアルテ氏だ。日本人の奥様、智子さんとともに、より美味しい菓子を提供すべく、メニューの充実化にも余念がない。美味しい日本式カステラを味わいに、ぜひ立ち寄っていただきたい。日曜定休。



トラベル・インフォメーション

＊情報は 2009 年８月 14 日現在のもの。

ベレン地区

◆リスボン市街地から西へ約６キロほどの所にある、ベレン地区は、世界遺産に指定されているジェロニモス修道院、ベレンの塔のほか、発見のモニュメントなどもあり、見どころが集まっている。交通の便があまり良いとはいえないが、リスボン観光のハイライトとして、ぜひ訪れたいエリアだ。

◆効率よくまわるには、ベレンへの半日観光バスツアーや、リスボン市街地の主要な観光スポットとベレンなどを巡回して走る「ホップオン・ホップオフ」型（乗り降り自由）の観光バスを利用するのも一案。ツーリスト・インフォメーション・センターで詳細を確認のこと。「Carristur」社や「Cityrama」社などが運行。

発見のモニュメント

Padrao dos Descobrimentos
Avenida de Brasilia, 1400-038 Lisbon
Tel: (0351) 213 031 950
www.padraodescobrimentos.egeac.pt

リスボンのシンボル的観光スポットとなっているが、建設されたのは 1960 年と、歴史は浅い。エンリケ航海王子の没後 500 年を記念して建てられた。帆船がモチーフになっており、エレベーターで屋上に上がれば、すばらしい眺めを楽しむことができる。なお、このモニュメントの足元にある広場には、ポルトガルが世界を「発見」した年度の記された世界地図が描かれている。日本が発見されたのは 1541 年で、これは、豊後にポルトガル船が流れ着いた年。月曜休館。

ジェロニモス修道院

Mosteiro dos Jeronimos
Praca do Imperio, 1400-206 Lisbon
Tel: (0351) 213 620 034
www.mosteirojeronimos.pt

ヴァスコ・ダ・ガマたちが、インドへの航海に出発する前に、夜通しこもって祈ったという修道院があったところに、ガマのインド航路開拓、エンリケ航海王子の業績を称えて建てられた。その規模と壮麗さには驚きを禁じえない。1502 年、マヌエル 1 世の命により工事が始まったが、完成まで約 300 年を要したという。なお、聖ジェロニモス（英語では Jerome、347 - 420）はもともと聖職者で、新約聖書のラテン語翻訳版を編んだことでも知られる。中には、ガマの墓＝写真すぐ左上、ポルトガルの偉大なる詩人、ルイス・デ・カモンイス（Luis de Camoes、1524-1580）の墓＝写真右＝もある。世界遺産。月曜休館。

ベレンの塔

Torre de Belem
Av. Brasilia, 1400-598 Lisbon
Tel: (0351) 213 620 034
www.mosteirojeronimos.pt

ジェロニモス修道院の建設を決めたマヌエル 1 世の治下に建てられた塔。もともとは、テージョ川を行き来する船を監視するための要塞だったという。６層からなり、上層階は王族の居室、最下層は潮の干満を利用した水牢として用いられたこともあった。世界遺産。月曜休館。

アジュダ宮殿

Palacio Nacional da Ajuda
Lg. da Ajuda, 1349-021 Lisbon
Tel: (0351) 213 620 264
www.imc-ip.pt

ブラガンサ王朝時代に建てられた王家の居城のひとつ。現在の建物は 19 世紀初めに、英国のバッキンガム宮殿をモデルに建設された。今は迎賓館として使われている。水曜休館。

ファドを聴きに

切ない旋律を感情豊かに歌い上げる、ポルトガルの民俗歌謡「ファド Fad」。スペイン南部で発達したフラメンコは歌と踊りとギターからなるが、こちらは歌と伴奏のみ。サン・ロケ教会のあるバイロ・アルト地区や、アルファマ地区にはファド・ハウスやレストランが軒を連ねる細い通りがいくつもある。ショーが始まるのが午後 10 時ごろ（食事付きなら、もっと早くにテーブルにつくことになる）、ひととおり見るだけでも午前零時ごろになることが多いので、ホテルに近い店に行くか、帰りはタクシーの利用をお薦めする。ホテルで最寄の店を紹介してもらうと良いだろう。ショーチャージはひとり 20 ～ 25 ユーロ程度。これに、飲み物代、あるいは食事代が別途必要。

個人ブログ大募集!!

あなたのブログをジャーニーのホームページにリンクしませんか？

現在、インターネット・ジャーニーへのアクセス数は月平均約11万。
あなたが発信している英国での生活に関するブログを、
今よりちょっぴり多くの方にご覧いただくためのお手伝いができるかもしれません。
営利を目的としていない個人のブログであれば、リンクはもちろん無料です。
お申し込みはインターネット・ジャーニー「個人ブログの部屋」をご覧ください。

※掲載にあたり、事前に一定の審査をさせていただきます。内容によってはリンクをお断りしなければならない場合もございます。予めご了承ください。

インターネット・ジャーニー www.japanjournals.com